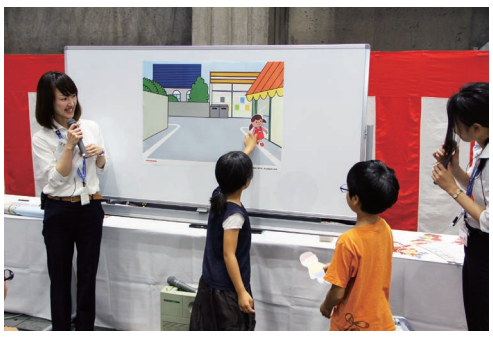
Close Up

クローズアップ
四輪販売会社

「あやとりぃ」は２日間で６回実施され、合計 45 人の子どもと保護者が参加した



ワークシートを使って道路で歩くべき場所はどこか問いかけ、自ら示してもらう

Honda Cars 岡山が子どもへの交通安全教育を実施

Honda Cars 岡山 福富店の長﨑涼子さん（左）
中島西店の髙橋沙紀さん（右）

会場内には Honda 自転車シミュレーターも設置され、多くの子どもが体験した

岡山県内に 18 拠点を展開する Honda Cars 岡山は７月８、９日の２日間、大型展示施設のコンベックス岡山で「夏の大商談会」を開催。新車・中古車の購入を検討しているお客様と一緒に子どもも多数来場することから、このイベントの中で同社の女性スタッフが子どもを対象に「あやとりぃ　ひよこ編※」（以下、あやとりぃ）を活用した交通安全教室を実施した。同社では、2015 年から女性スタッフを「あやとりぃ」による教育ができる指導者として養成。以来、各拠点のショールームに訪れる子どもに随時、交通安全教育を行っている。今回のような全拠点合同の大きなイベントで「あやとりぃ」を取り入れるのは初めての試みだ。その背景を Honda Cars 岡山販売部企画推進グループの廣澤旭さんは次のように話す。

「今回のイベントのコンセプトは『Honda のファンづくり』です。Honda の交通安全思想を楽しく、わかりやすく未来のドライバーたちに伝えることが、将来の Honda ファンづくりにつながると考え、会場内に Hondaの安全について紹介するコーナーを設けることにしたのです。小さいお子さんも多数来場されるので、この機会に日頃から取り組んでいる『あやとりぃ』を体験してもらおうと考えました」。

「あやとりぃ」の指導者役となったのは、Honda Cars 岡山 中島西店の髙橋沙紀さんと福富店の長﨑涼子さん。二人は参加した子ども一人ひとりとの対話を通じて、道路の歩き方や歩くべき場所、止まって観ることの大切さを説明した。

2015 年に「あやとりぃ」の指導者養成研修を受けたという髙橋さんは「Honda のスタッフの方による実演を見て、自分にもできると思い、ショールームで活用することにしました。今日は、私たちの問いかけにお子さんたちが一生懸命答えようとしてくれたのがうれしかった」という。「あやとりぃ」を使うのは今回が初めてという長﨑さんは「お子さんたちが参加できるように工夫されていて、とても使いやすい教材だと思います。私自身も楽しむことができました」と感想を語った。

「多くのお子さんの笑顔を見ることができたので、やって良かったと思います。交通安全活動の意義を再認識できました」と廣澤さんは手ごたえを感じている。Honda Cars 岡山は２月に開催予定の「冬の大商談会」でも「あやとりぃ」による交通安全教育を実施する考えだ。

※あやとりぃ ひよこ編＝４～５歳児に幼稚園や保育園等の集団教育の中で「音（交通環境音）の理解」「必ず止まること」「必ず観ること」「信号機の理解」という交通安全の基本を繰り返し学んでいただく交通安全教育プログラム。
「あやとりぃ」は「あんぜんを やさしく ときあかし りかいして いただく」の略。詳細は以下のホームページを参照。
http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatorii/ayatorii1.html

Close Up

クローズアップ
福祉安全運転

Honda の福祉領域における安全運転の具体的な取組みをメディア向けに公開

実際に運転再開をめざす方が自操プログラムを受講している様子を公開

Honda 安全運転普及本部のスタッフが、記者やジャーナリストにサポートソフトと自操プログラムの内容や普及状況について説明

自操プログラムの様子。旋回ノブを取り付けている状態とそうでない状態の運転を様々な状況で比較

ハンドルに旋回ノブを取り付けた状態

7 月 18 日、Honda は交通教育センターレインボー埼玉（以下、レインボー埼玉）で自動車関係の専門誌・インターネット媒体の記者やジャーナリストの方々を集め、「安全運転普及活動 福祉領域メディア取材会」を開催した。Honda では、脳卒中をはじめとする脳や身体に障がいのある方の運転再開を支援するための取組みを進めている。取材会は、こうした活動をより広く一般に知っていただくことで必要な方々の手元に情報が届くことを目的としている。

具体的な取組みとして、Honda が開発したリハビリ向け運転能力サポートソフト（以下、サポートソフト）と自操安全運転プログラム（以下、自操プログラム）を紹介。サポートソフトは、シミュレーターを使って病院内で運転能力を評価し、車両訓練に移行できるかの判断を支援するものである。一方、自操プログラムは、運転時における現状の把握、見えた課題に対する訓練を行い、より安全に自由な移動を獲得してもらうためのプログラムだ。全国７ヵ所の Honda の交通教育センターで受講可能で、2014 年から 2017 年６月末までに 178 人が利用している。

この日は、運転再開をめざす平松吉一さんがレインボー埼玉のトレーニングコースで自操プログラムを受講している様子も公開された。平松さんは 2016 年２月に脳梗塞で入院し、同年８月に退院した。運転免許センターでの臨時適性検査を受けたが運転にあたっての条件の付与は特にない。

平松さんのリハビリを担当するイムス板橋リハビリテーション病院・作業療法士の伊賀博紀さんは「平松さんは左手が不自由なので、ハンドルは右手だけで操作することになります。ハンドルに旋回ノブを取り付けて運転することが、より安全だと考え、今回は旋回ノブの取り付けている状態とそうでない状態の運転を実車で評価してみることにしました。実際にクルマを運転している様子を確認して判断できるので、机上の検査ではわからない部分も明確にすることができます」と自操プログラムを評価する。

平松さんが運転するクルマの助手席に同乗したレインボー埼玉の倉田誠インストラクターによれば、旋回ノブのない状態では右折する際にハンドルの戻し遅れが見られたが、旋回ノブを取り付けた後はそれが見られなくなったという。

実車訓練を終えた平松さんは「今日はリラックスして取り組むことができ、運転再開に向けて自信がつきました。旋回ノブも使ってみようと思います」と語ってくれた。

交通コメンテーターの西村直人さんは「運転再開をめざしている方にわかりやすく、納得性の高い実車訓練の仕組みが既に完成し、提供できていることに驚きました。高齢化社会の進展もあり今後、こうした訓練を受けることがより一般的になっていくでしょう。今後の交通社会を見据えた Honda ならではの取組みだと思います」と述べるなど、取材会に参加した記者やジャーナリストの方々が福祉領域の安全運転普及活動に対する理解を深めていた。